妙の光

復刊105号

90歳で元気に身延山参り

新潟市角田浜　**大滝リユさん**（90歳）

9月末、総本山身延山久遠寺への団体参拝旅行に、リユさんは長男夫婦と次男・次女の5人で参加した。満90歳を数えるが元気で、広い山内を皆さんと一緒にくまなくお参りして歩き通した。

大滝家は専業農家でリユさんは2人姉妹の長女なので婿取りだった。やはり婿だった父と夫は村や消防団、土地改良組合等の役職で忙しかった。母が病弱だったから、学業を終えた15歳からほぼひとりで農作業を担ってきた。田んぼの他に麦・サツマ芋・スイカ・菜種作りと、長男が後継者になるまでは忙しかった。夫は50代でくも膜下出血で倒れたが、幸い80過ぎまで長生きしてくれた。

「3人の子育ては母親がまかってくれたが、あの頃妙光寺の先々代住職が全国に先駆けて始めた0才児から預かる保育園が村内にあって本当に良かった。忙しい農家の嫁の立場を考えてのことだと聞いた。私は嫁ではなく娘だから、辛いと思うことはなかったけど、ずっと働き通しだったから、今こうして元気でいられるのかもね」と笑顔で言う。

（2ページに続く）

通巻126号　復刊105号　2018年12月1日（季刊）　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

facebook 始めました

行事案内

月忌納め（お札配り）

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。県外等でお札を希望される方はお送りします。

除夜の鐘・お焚き上げ

12月31日㊊

午後10時30分から、本堂で除夜法要。11時半ころから古いお札、しめ縄等の〝お焚き上げ〟があります。除夜の鐘は大玄関受付で整理券を配布し、どなたでも必ず撞いていただけます。温かい甘酒、コンニャクの用意もあります。ご家族そろってお参り下さい。

※お焚き上げの古いお札等、当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。

年始参り

1月1日㊋、2日㊌

午前9時～午後4時。最近はご夫婦や家族そろってという方が増えています。お気軽にお出かけください。玄関で受付されたあと、住職が大広間でお待ちしています。1日はお茶席のご用意もあります。

『星祭り』祈願札

個人ごとにその年の星回りがあって、元旦の朝に本堂で希望者の『星祭り』を行い、1年の安泰を祈願します。家族ごとに1枚のお札にして1軒2千円でお届けします。

新規お申し込みの方は、家族全員の氏名、性別、生年月日を書いて12月20日までにお知らせ下さい。継続の方は申込不要です。

厄除け祈願祭

2月2日㊏、3日㊐

いずれも午前10時から。

厄年の早見表は別紙チラシにありますので、ご確認ください。厄年以外の方のご祈祷もお受けいたします。同封の返信用ハガキにてお申込みください。

信行会とボランテラ

1、2月の「月例信行会」とボランテラはお休みです。

次回は3月3日㊐「信行会」、3月15日㊎「ボランテラ」です。

「お寺でヨガ」は3月までお休みです。

あとがき

10月のお会式で「妙光寺特製干菓子」を披露しました。心配していましたが、幸い大好評でした。11月には結婚式もありました。華やかな門出を、お寺でお祝いしました。冬に入り、定例の行事はお休みになります。穏やかな冬であるように、祈っております。

（新倉理恵子）

信心プラス

新潟市角田浜　大滝リユさん（90歳）

3代続く檀徒総代

長男の剛さんは現在妙光寺の檀徒総代で、リユさんの夫と父も総代を務めた。ことに父の金吾さんは、現院首と新潟市中心部から妙光寺までの25㎞を団扇太鼓を叩いて歩き、70代後半で一緒にインドへ仏跡参拝にも行った。総代引退後、認知症になってからも「今日はお寺に行く日だ」と、着替えて家を出ることが度々あるほど思いは妙光寺にあった。

病弱な母ソヨさんは信仰で健康を取り戻そうと、真冬に水垢離する寒行をし、雪の夜道を団扇太鼓を叩きながら寺参りをした。当時は仲間も多く、夫の金吾さんも皆と一緒にお参りした。また県内外の日蓮宗寺院をお参りに訪ね歩く〝千ガ寺参り〟も、夫婦で行った。そのおかげか、2人とも長命だった。

リユさんの祖母タキノさんは、37歳で亡くなった夫を弔うため、身延山の宿坊にお墓を建てた。〝本山納骨〟といい、熱心な信者が日蓮聖人と同じ地に分骨埋葬する習慣で、今も続く。大滝家ではその墓にタキノさん・金吾さん・ソヨさんも分骨してあり、リユさんの本山参りの目的はそこにもある。

一番の楽しみはお寺参り

日々の農作業に追われてきたリユさんの初めての身延山参りは、50歳を迎えたときだった。「長男の運転で両親と自分たち夫婦の5人旅。得も言われぬ感動で、忘れられない思い出だ」と語る。

以来お寺の団体で、時には家族で参拝し、標高2千m徒歩4時間の七面山には4回登った。登らない時も含めると参拝の回数は数えきれない。「いつお参りしても、なんとも言えない清々しさと、心の安らぎを感じる。以前は8時間以上かかったけど、高速道路ができた今は5時間弱だから、日帰りだってできそう。まだまだ行ける」と気力は衰えない。

墓じまい？

江戸時代から各宗派とも、信仰を同じくする人たちの集まりである〝講中〟が、全国各地にあった。現在妙光寺では集落ごとに名前は残るが、活動しているのは4カ所だ。リユさんは『角田浜講中』の中心でまとめ役だった。

「最近は近所のお参り仲間が亡くなったり病気をしたりで、めっきり少なくなった。講中の集まりも冬と夏の年2回やっていたのが、今は冬だけで数人しか集まらないし、妙光寺の行事参加も少ないのが寂しい。」「身延山にあるお墓も孫の代になるとお守りが負担になると困るから、今流行の〝墓じまい〟をして妙光寺に引き上げようかと考えていた。そしたら長男夫婦が自分たちも入りたいから心配するなと言ってくれたことが嬉しい。子供も孫もひ孫も、それぞれの人生だから何事も無理強いはしない」と語る。自身は妙光寺の行事参拝を欠かさず、心穏やかな毎日を過ごしている。

（院首記）

ひょうとして、雨女？

9月29～30日の2日間、身延山団体参拝に行ってまいりました。もともとは31日までの2泊3日で、七面山登詣を予定していました。ところが台風の影響で登山道が危険と連絡があり、急遽1泊2日に短縮しました。幸いにして台風の直撃を受けることなく、無事に日程を終えることが出来ました。振り返れば住職交代式もお天気がすぐれず、初めてのご判様も送り盆も雨降りと、どうにも雨に見舞われます。〝雨女〟の自覚はありませんでしたが、院首は「住職になってから、ご判様が雨になったことはない」と常々お説教のネタにしてきました。私は法力不足なのかなと心配になることもありましたが、今回のお参りでのある再会で考え方が変わりました。

久遠寺での再会

久遠寺では、「祖廟輪番給仕（そびょうりんばんきゅうじ）」をしました。日蓮聖人にお給仕をすることを目的としたお参りです。お給仕と言っても、御飯を作るわけではもちろんなく、日蓮聖人の御遺骨が収められたお堂の前で法要を行い、お祖師様に感謝してこれからも信仰に励むことを誓う儀式です。法要の導師は参拝寺院の住職が務めますが、他のお寺さんと一緒になることもあります。今回は妙光寺と都内のご寺院の二ヶ寺でのお参りと聞いてはいたのですが、当日僧侶の控室に入った私はとても驚きました。

一緒になったご住職が、私が僧道林という道場で教えていただいていた先生だったのです。さらに控室でお話してみると、先方も七面山へ登る予定が台風で中止になったとのこと。予定では、先生が七面山に引率し、久遠寺での奉仕は先代の院首様が務められることになっていたそうです。七面山に登る予定は一日違っていましたので、予定ではすれ違いです。台風がなければ再会することはなく、日蓮聖人の御前でご一緒に法要をあげることもありません。前回もご縁のことを妙の光に書きましたが、あらためて仏様のおはからいかなと思った次第です。

霊山之契――発祥は妙光寺

さてこの輪番奉仕では、お参りの最後に『霊山之契（りょうぜんのちぎり）』を授かります。「『霊山之契』を戴くことは現世においても、また未来世にてもなおこの契りに結ばれ、いつも日蓮聖人とともに在るという証でありますので大切にお仏壇にお祀りして下さい。」と久遠寺からのご案内には記されています。つまり、日蓮聖人とのご縁を自覚し、努めて生きなさいという証なのです。まさにこのことを、ご縁の不思議という形で現されたのだなと思わずにはいられません。

実は、この『霊山之契』の発祥は妙光寺と聞いています。「霊山への契約にこの判を参らせ候……」日蓮聖人が妙光寺と縁の深い五ケ浜の遠藤家の先祖、遠藤正遠氏に遺されたお手紙の一節です。佐渡流罪の日蓮聖人を幕府の役人として見張る立場の遠藤氏が、信者となって仕えてくれたことへの礼状で、日蓮聖人が遠藤氏を霊山に案内する約束としてこの判（印鑑）を授けるという内容です。約束の証の印鑑こそが、皆さんもご存知の「御判（ごはん）」なのです。

妙光寺では、この『霊山之契』を亡くなられた折に棺に入れます。皆さんには「あの世の入り口で日蓮聖人が待っていてくださる。という約束のことなんですよ」などとお話します。実はそれだけではなく、生きている間から仏様や日蓮聖人、周りの人々と縁を繋いで、大事にしていきなさいという教えが込められています。日々の生活の中の雨や台風のような一見すれば不運や不幸に思えることでも、実は私達に何かを教えようとしている。そう考えて、これからも明るく前向きに色々なことを受け止めて生きていきたいと改めて思いました。

身延山団体参拝は来年も予定しています。来年こそは七面山にもお参りします。是非ご参加ください。

寺のうごき 秋

◆秋のお彼岸　9月23日㊍

彼岸花（ひがんばな）の咲くなかで墓地合同法要を行いました。

秋風が爽やかに吹き抜ける本堂での彼岸会法要は、心穏やかになれたそうです。

地区の当番によるお斎（とき）はすべて手作りです。

午後からは大広間で住職の法話。

◆総本山身延山久遠寺団体参拝　9月29日㊏～10月1日㊐

皆さんの笑顔がすてきです。

大型台風と重なり日程を1日縮めての参拝旅でしたが、雨の身延山は静かでゆっくりお参りできました。

門前の旅館での夕食は、お酒も入ってくつろぎムード満点です。

◆お会式・住職交代1周年記念茶会・中野亘陶展　10月14日㊋

『お会式（えしき）』とは日蓮聖人のご命日法要のこと。妙光寺ではこの日にあわせて希望者に生前戒名の授与を行いました。

生前戒名授与の方には、式に先立ち研修を受けていただきます。

記念茶会はお茶室『湛山亭』と、客殿上段の間の2カ所に分かれて住職、院首がそれぞれ亭主を務めました。近所の小学生も飛び入りで“お運び”です。

当番の皆さんの心込めたお斎に、記念のお供物が付きます。今年は院首と有志が手作りした妙光寺特製干菓子が、大好評でした。

京住院で『中野亘陶展』を1週間催し、期間中ずっと晴天に恵まれ、たくさんの来場者がありました。

◆結婚式　11月23日㊎

檀徒の次女髙見澤亜季さんが、お相手の山田哲也さんとの相談から、「お父さんのお墓もある妙光寺でぜひ」と希望され、挙式されました。披露宴も妙光寺出入りの仕出し屋さんが出張し、台所で調理したお料理は美味で終始和やかでした。

◆七五三詣り　11月17日㊏

盛遼太郎くんと小川虹季くんが、ご家族でお参りして、身体健全、発育増進のお加持を受けました。

寺泊山法福寺住職　海津武尚上人に聞く

良恵住職とともに迎える佐渡配流七五〇年

寺院には、お寺同士で支え合う「干与人制度」があります。各々の寺院で困ったことが起こったとき、相談に乗る役割を持つ寺院があらかじめ決められているのです。妙光寺の正干与人は、寺泊にある法福寺です。妙光寺から海沿いの道を車で30分のところにある法福寺で、海津上人にお話を聞きました。

Q 最初に、法福寺の歴史を教えてください。

海津　天平年間の七五七年に開創しています。越前国の泰澄大師が山頂に開いた法華堂が始まりです。泰澄大師は修験者として有名な方で、その頃は修行の場だったのでしょう。いつの頃か法華寺という名になり、その後八二年に伝教大師最澄が当地を訪れて、天台宗の寺になりました。一二七一年、日蓮聖人が佐渡配流の際に、風がおさまるのを待ってここに一週間滞在されました。その時、当時の法華寺住職が日蓮聖人に心服して、法福寺という寺号を頂いて日蓮宗の寺になったのです。日蓮聖人はその後ここから佐渡に船出し、時化にあって妙光寺のある角田浜に流れ着いたということになります。

Q 法福寺と妙光寺は、昔からご縁があったということですね?

海津　一二七一年には確かにご縁がありました。その後の具体的な関係のはじまりはよくわかりませんが、明治32年から法福寺の住職を務めている54世海津日忍上人という方が、その直前まで妙光寺の住職をしているんです。法福寺本堂に、「寄付角田山海津日忍」と刻まれた台座があります。ですから明治には、おそらく様々な関わりがあったのだろうと思います。日忍上人の甥にあたる55世海津日雄上人は、法福寺で最初に妻帯した住職で、私の妻の曽祖父になります。

Q それで海津武尚上人ご自身は、良恵住職の従兄になるんですね?

海津　院首小川英爾上人と私の母が姉弟です。私の母は5人きょうだいの4番目で、院首のすぐ上の姉になります。妙光寺の先々代である祖父が遷化したのは、私が生まれる直前でした。私からすると、院首は20歳年上の叔父で、良恵上人は10歳年下の従妹です。

Q でも海津上人の家は、お寺ではなかったそうですね?

海津　私の家――旧姓は島田ですが――島田家の祖父は、横浜で大工をしていました。でも祖父母はとても信仰熱心で、長男である私の父を僧侶にしたんです。私が生まれた頃、父は横浜の家から池上の宗務院に通勤していました。だから、私が育ったのは、横浜市の中心部です。駄菓子屋さんに通うのが楽しみな都会の子でした。意識は今も横浜っ子です。

海津武尚上人（45歳）
横浜市生まれ。横須賀育ち。院首小川英爾上人の姉・みゆきさんの次男。15年前、法福寺の娘さんと結婚し、3年前に住職となった。昨年秋、母を亡くす。一男一女のお父さんでもある。

Q 横須賀のお寺に引っ越したのは、いつですか?

海津　小学校一年生の時です。父が横須賀市の法道寺の住職になりました。横須賀といっても寺があるのは片田舎で、周辺には駄菓子屋さんなんて一軒もありません。水洗トイレしか知らなかったのに寺のトイレは汲み取り式で窓からは墓場が見えるし、小学校一年生にとっては深刻な問題でした。緑豊かなところに引っ越したというのは小学生には関係ありませんから、環境の激変は大ショックでした。今は私の兄が、法道寺の住職をしています。

Q 次男の海津上人が僧侶になろうと思ったのは、なぜですか?

海津　父からは、一度も僧侶になれと言われたことはないんですよ。でも6歳からお寺の子になって、「仏飯を食む」（仏前に備えたご飯を食べる）というんですが、そうやって育ってきたんだから僧侶となってお返しをする、という意識はなんとなくありました。信仰熱心な父方の祖母にかわいがられたことも影響しているような気がします。私も小学校5年くらいから法事の手伝いをして、中学生のころには、お坊さんになろうと思っていました。20歳のときに信行道場に行って僧侶の資格を取りました。

Q では、大学は立正大学ですか?

海津　いえ、それが某私大の理学部数学科なんです。すぐにはお坊さんになりたくない。警察官か教員になって、その傍ら仏教の教えを語るのもいいな…とか思っていまして、大学を卒業して29歳までは神奈川県の中学校で数学の講師をしていました。聾学校にも一年間勤務しました。勉強になりましたね。でも正式採用にはなかなかなれなくて、悩み多い時期でした。

Q 警察官、教員、僧侶…人と接する仕事ですね。

海津　格好よく言えば、なんとなく「人の役に立ちたい」と思っていたんです。できるだけ大勢の人と関われる仕事をしたいと思っていました。ところが30歳を目前にしても、教員採用試験には受かりません。どうしようか…と思っていたころに、妻と出会ったわけです。うちのお寺の手伝いに、彼女が来てくれたことがあって「感じのいい子だな」と思いまして……そこうするうちに法福寺ではお婿さんを探しているという話も聞こえてきて、先代住職に手紙を書いて「私がお婿さんになるのはどうでしょう?」と頑張ったのが15年前の秋でした。

Q わぁ、未来の義父に手紙を書いたんですか?

海津　そうなんですよ。頑張りました。自分を生かす場所を探していたんですね。考えてみると、私は「僧侶になろう」とは思ったけれど、「僧侶で生きよう」とは思っていなかった。法福寺は、私にとっては生まれ変わる場所だったような気がします。寺泊に行くのは、母の実家の角田浜に帰るようなものですから、ごく自然なことでした。それで30歳の春に結婚して法福寺に来ました。母は昨秋亡くなりましたが、母の故郷の海を見ながらお坊さんをしているのは、ご縁以上のものを感じます。

Q 住職になられて丸3年ですが、法福寺の今後をどう考えていますか?

海津　院首である義父はいますが、やはり住職の仕事は忙しいです。仏事はもちろん、本堂までの道路の拡幅を計画中で、その実務もあります。それから保育園もやっていて園長は妻の妹ですが、義妹には現場に専念してほしいので事務長兼用務員は私です。寺の将来のことも考えたいのに、毎日の仕事に追われていることが悩みですね。ただ檀家さんだけでなく一般の方でも、いろいろな相談事に来られる方がいるんです。話すだけでホッとした、と言っていただける時はうれしいです。

Q 叔父さんである小川英爾上人は、海津上人から見るとどんな存在ですか?

海津　私は葬儀の〝引導文〟を自分で書いているのですが、それは妙光寺では以前からやっています。私が僧侶としてやってみたいと思うことは、たいてい叔父がすでにしているんです。安穏廟を始めたころは批判もあったようですが、我々の世代から見ると人望があります。私にとって叔父は大きな目標です。

Q 今年6月の法福寺のお大会で、良恵住職がはじめての法話をさせていただいたと聞きましたが、いかがでしたか?

海津　法福寺では毎年6月に「開山会」を行います。今年の法話は、良恵住職にお願いしました。良恵さんの法話デビューということで、肉親としては少し心配でしたが、みごとな法話でした。当山法福寺の総代様から「感銘を受けた」というメールも頂いて、本当に良かったと思っています。

Q 二〇二一年は、日蓮聖人の佐渡配流から七五〇年ですね。

海津　佐渡配流は日蓮聖人が50歳の時なので、生誕八〇〇年でもあります。法福寺にとっても、妙光寺にとっても、日蓮宗全体にとっても大切な年です。ご縁の深い寺で、いとこ同士ですから、これからも協力し合っていきたいですね。

ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

（聴いた人　編集部・新倉理恵子）

誌上法話　小川良恵

譬喩品　第三
三車火宅

譬喩品の「譬喩」はたとえ話のことです。『法華経』は前章の方便品において、仏に成るための乗り物は一つであることが明かされました。譬喩品では、この一仏乗の教えを誰もが理解できるように、文字通り「たとえ話」を用いて説いています。こうしたたとえ話がいくつも語られるのが『法華経』の特徴で、代表的な7つのお話を「法華七喩」といいます。譬喩品には、その一番目であり最も有名な「三車火宅の喩え」が登場します。

遊びほうける子どもたちと父親

ある長者が、大きな屋敷を持っていました。しかしその屋敷は、門がたった一つしか無く、建てられてから長い年月が経っていたため老朽化が酷く、今にも崩れそうな状態でした。しかも長者が留守の間に、火事が起こってしまいました。ところが家の中で遊び呆けている子どもたちは、気づく様子がありません。慌てて帰宅した父親である長者は、一計を案じて呼びかけます。「素晴らしい玩具をあげるから出てきなさい。羊の車、鹿の車、牛の車があるよ。今、門の外にあるから、出てきて好きな車を選びなさい」大喜びで燃えさかる家から出てきた子どもたちに、長者は安堵し、全員に最高級の車を与えます。それは、様々な装飾が施され、真っ白で大きな牛が引く、実に豪華な大白牛車でした。

すべての衆生に与えられる仏乗

このたとえ話の中で、「火宅」とは苦しみや迷いに満ちたこの世界を示し、火事に気づかない子どもたちとは私達衆生を表しています。「長者」とは仏様のことで、自らが苦しんでいることにすら気づいてない私達を救うために、「三車」つまり方便品第二で説かれた声聞乗・縁覚乗・菩薩乗という救いの道を示して下さりました。

しかし最終的に、火宅を離れて出てきたところへ、全員に同じ大白牛車、すなわち「仏乗」を与えて下さった……というのが「三車火宅の喩え」です。仏に成るための道は、誰にとっても一つであるという教えを示しているのです。

角田山妙光寺インフォメーション

秋奉加ありがとうございました。来年から可能なら玄米のままがありがたいです。

毎年秋には、農家の檀徒さんから収穫された新米を奉納頂いています。昔は托鉢のように、お寺から役僧が一軒毎にいただきに伺っていました。近年は直接持参してくださったり、地区の世話人がまとめて届けてくださったりします。2ページで紹介した講中の集まりで、持ち回りの会場にそれぞれが持参してそれを住職が持ち帰る所もあります。正月まで名簿と共にご宝前にお供えし、その後保管して行事ごとの〝おとき〟等に使わせていただいています。

できれば今後は玄米のまま奉納いただけると、そのたびに精米してお出しできるので、お礼方々お願いする次第です。

参道工事の遅れ

境内に敷いた砂利がザクザクして歩きにくく、車椅子も使えないとの声があります。そこで駐車場から客殿玄関までとそこから本堂前をつなぐ新たな参道の設置、さらに墓地と山門をつなぐ参道の舗装を計画して工事の予定を立てました。

しかし思いのほか面積が広くて費用がかかり、老朽化した山門の耐震補強が必要との診断もされてしまいました。そうなると参道の取り付け部分との段差の問題もでてきて、計画が暗礁に乗り上げています。一方ここに来て遺産寄付の話をいただくなど光明が差した感じもあり、実現に向けてさらに検討を加えて参ります。今しばらく、お待ちください。

マレーシア・ペナン島団体参拝　追加募集

妙光寺が属する日蓮宗では海外にも幾つかの寺院がありますが、現在最も活発に活動しているのがマレーシア・ペナン島の一念寺です。穏やかなイスラム教徒の多い国ですが、中華系を中心に現地の人たちが熱心にお題目を唱えています。

ここで主管(日蓮宗から派遣された住職)を務める伊藤悠温上人は、大学の卒業論文で妙光寺をテーマにし、その後も毎年夏にお手伝いいただいた若い方です。そんなご縁から一念寺を参拝し信者の方との交流、併せてリゾート地としても世界的に有名なペナン島観光をする予定です。

一次募集で定員に満たなかったので、追加募集を行っています。参加者も現地ガイドも妙光寺関係者で、安心で気兼ねなしです。別紙詳細をご覧いただき、早めにお問い合わせください。

毎週日曜の一念寺の法要（最前列が伊藤上人）

妙光寺の
お宝紹介
vol.3

高橋泥舟（でいしゅう）のお題目

高橋泥舟は勝海舟、山岡鉄舟とともに幕末の三舟と呼ばれました。共に明治維新への激動期に、徳川家最後の将軍慶喜（よしのぶ）を取り巻く主要人物です。

泥舟は山岡家に生まれて高橋家に養子に入り、妹が鉄舟と結婚して山岡家を継ぎました。泥舟は鉄舟の義兄にあたります。3人は書にも優れ、泥舟は槍の名手でもありました。また心の底からの日蓮宗信者だったと伝えられています。

泥舟は、明治元年の冬のころ会津に向かう途次に越後の曽根（現新潟市西蒲区西川）に来たそうです。当時造り酒屋を営んでいた小林家では、「雪で峠越えが無理だから」と春までの逗留を勧めました。

明治26年秋に泥舟は再び小林家を訪ね、そのときの礼をしたいと申し出ました。小林家の当主は、造り酒屋の当時の店名『長門屋』の看板と、菩提寺の妙光寺のためにこのお題目と扁額を書いてほしいと願いました。看板の文字は小売店になった店の包装紙に今も使われ、扁額は本堂前の中門に現在も掲げられています。共に日蓮宗の信者という不思議な縁から、泥舟の書が妙光寺にあります。

Q「生前契約」とはなんですか？

「生前契約」は、葬儀の事前予約のことです。近年、独り身で死後を託せる相手がいない、あるいは家族がいても事情で葬儀が担えないなどのご相談が増えてきました。妙光寺では多くのご希望があり、「生前契約」をお受けしています。もしもの場合、あらかじめお預かりした経費で、親族・知人・関係者へのご連絡から、葬儀のすべてを妙光寺が執行します。葬儀の場所や祭壇など、詳細はご相談して、法律上も有効な契約書類を交わします。予めお預かりする経費は元本保証の銀行口座で保管されます。県外から御遺体を搬送することも可能で、手続きは妙光寺が行います。追加の経費を御遺族に負担させることもありません。途中の変更や解約（返金）も可能です。いつでも、ご相談ください。